

# 秋の狐の尻尾

絵と文：張怡申（佐藤紀子）

日本語



松の山のふもと 紅いろの家の前で  
キツネのきーくんがトンボと遊んでる  
赤とんぼは唄が好き  
田舎のすてきな暮らしを歌ってる

♪ キツネのきーくんしっぽはまっしろで ふさふさ  
とんぼは歌うよ君にきかせる山の唄  
松の山は碧おうちが紅いろ  
田舎は どこもかしこも よい景色 ♪

のびのびとした歌声が トラの村長の家にも届いて  
村長もやってきて みんなにここにこ



栗の山の夜空いっぱい満天の星  
たくさんの星 キラキラ。  
キラキラ星 子りすの家へやって来た  
子りすの金色のしっぽを見に



金色のしっぽ ぴかぴか ふわふわして柔かく  
スラリと長い。子りすのかあさん 手に櫛を持ち、そろりと  
しっぽを梳かす。星たちはきらめいて  
鏡を明るく照らす

キツネのきーくん  
栗の山へ遊びに来たら  
目の前にひとすじの  
金色の光。  
ぴかぴか  
立ち止まり 目をこらすと  
金色の光 くるくる  
まわってた  
きーくん とたんに  
目が眩くらんでしまって  
まばたきパチパチ。  
よく見てみたら  
見えたのは、1匹の子りす



ぴかぴかしてたのは しっぽ  
きーくん  
びっくりしてぼうっとになった。  
自分のしっぽは 光らない  
大きな金色のしっぽ  
自分のしっぽとは  
比べものにならない

きーくんは紅いろの枕に頭をのせて  
自分の夢を見た  
金色のしっぽ ぴかぴか  
ゆらゆら揺れて ぴっかぴか





夢から醒めたら 影も形もなかった  
夢の中のこと 一切消えてしまった  
みんな夢だったのなら  
かしこいぼくは 何としよう  
ご先祖さまが 知恵の棒を持っている  
ぼく ご先祖さまのところへ行って お願いしてみよう

きーくんはご先祖さまのほこらの前にやって来て  
両手を合わせて ていねいにおじぎした  
きーくん：ぼくは世の中をしあわせにしたいのです。  
どうぞかなえさせてください  
ご先祖さま：それは本当か？  
きーくん：本当です  
ご先祖さま：では、お前に知恵の棒を授けよう。  
もしお前がよくない使い方をしたら、天は許さず、  
地も許さない。私もともに災いを受けることになる

きーくん：ぼくは金の棒を、世の中をしあわ  
せにすることに使います。キツネの家が  
代々栄えますように

ご先祖さま：よろしい  
目の前にひとすじの金色の光が差し  
一本の金の棒が目の前に落ちてきた  
欲しかったものが手に入り  
きーくんは それはそれはうれしかった

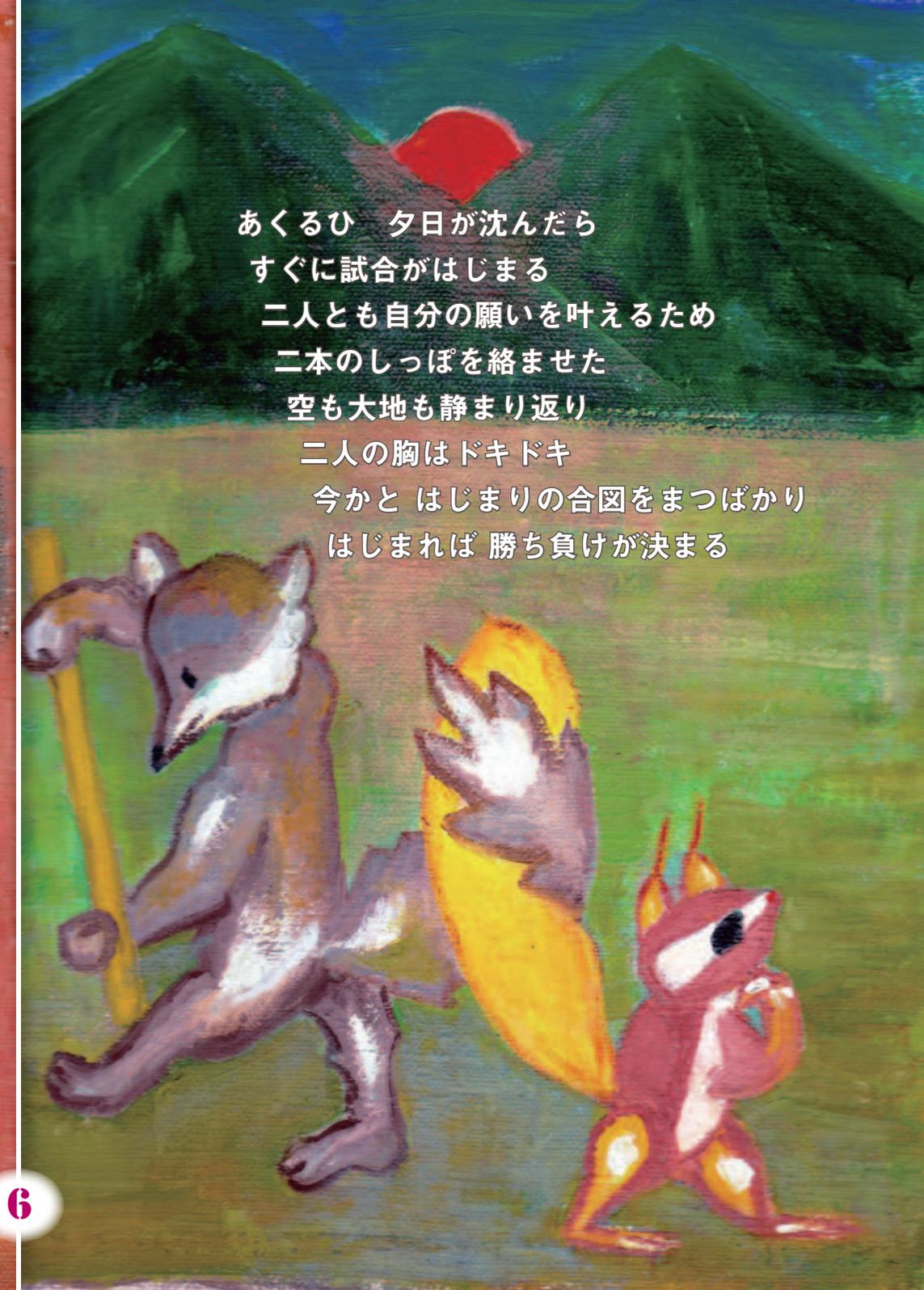
夕陽はまだ山の間落ちておらず  
きーくんは紫色の家にやって来た  
かわいい子りすちゃん、  
ぼくたち二人で力くらべして遊ぼうよ、と呼びかけた  
子りすは言った やらないやらない  
だってぼくは小さくて きみは大きいもの  
ぼくはきみと比べものになりっこないよ  
きーくん：きみは小さいけれど しっぽは大きいじゃないか  
きみが勝つに決まってるよ

それをきいて、子りすはとてもうれしくなった。  
おかあさんのためにがんばろう  
明日の夕方、栗の木の下で  
きーくんとしよう しっぽくらべ





夜がふけて静まり返ると  
きーくんは心配になって  
金の棒を抱えて 両手を合わせ  
しっぽ相撲に勝ちますようにとお祈りした



あくるひ 夕日が沈んだら  
すぐに試合が始まる  
二人とも自分の願いを叶えるため  
二本のしっぽを絡ませた  
空も大地も静まり返り  
二人の胸はドキドキ  
今かとはじまりの合図をまつばかり  
はじまれば 勝ち負けが決まる



はっけよいのかけ声とともに  
しっぽはまるで天に引っ張られたよう  
子リスが振り向くと  
山の上を飛んでいくきーくんが見えた  
きーくんのしっぽはぴかぴか  
子リスは両の目がくらくらした  
目をこらしてよく見てみると  
なんと、私のしっぽがきーくんのお尻について  
いる？

子リスのしっぽはきーくんに取り替えられてしまった  
うわーん うわーん おかあさーん  
その泣き声は空に響いた 陽は山の向こうに沈み  
星たちがまたたきはじめた  
子リスの泣く声に 星たちも涙をぽろり  
子リスは夢の中で おかあさんをなぐさめる  
おかあさんも悲しみ 涙を落とす  
子リスは夢の中で話しかける



おかあさん 悲しまないで 私のしっぽは戻ってくるから  
おかあさん 泣かないで  
おかあさんが泣くと私も泣いてしまうから

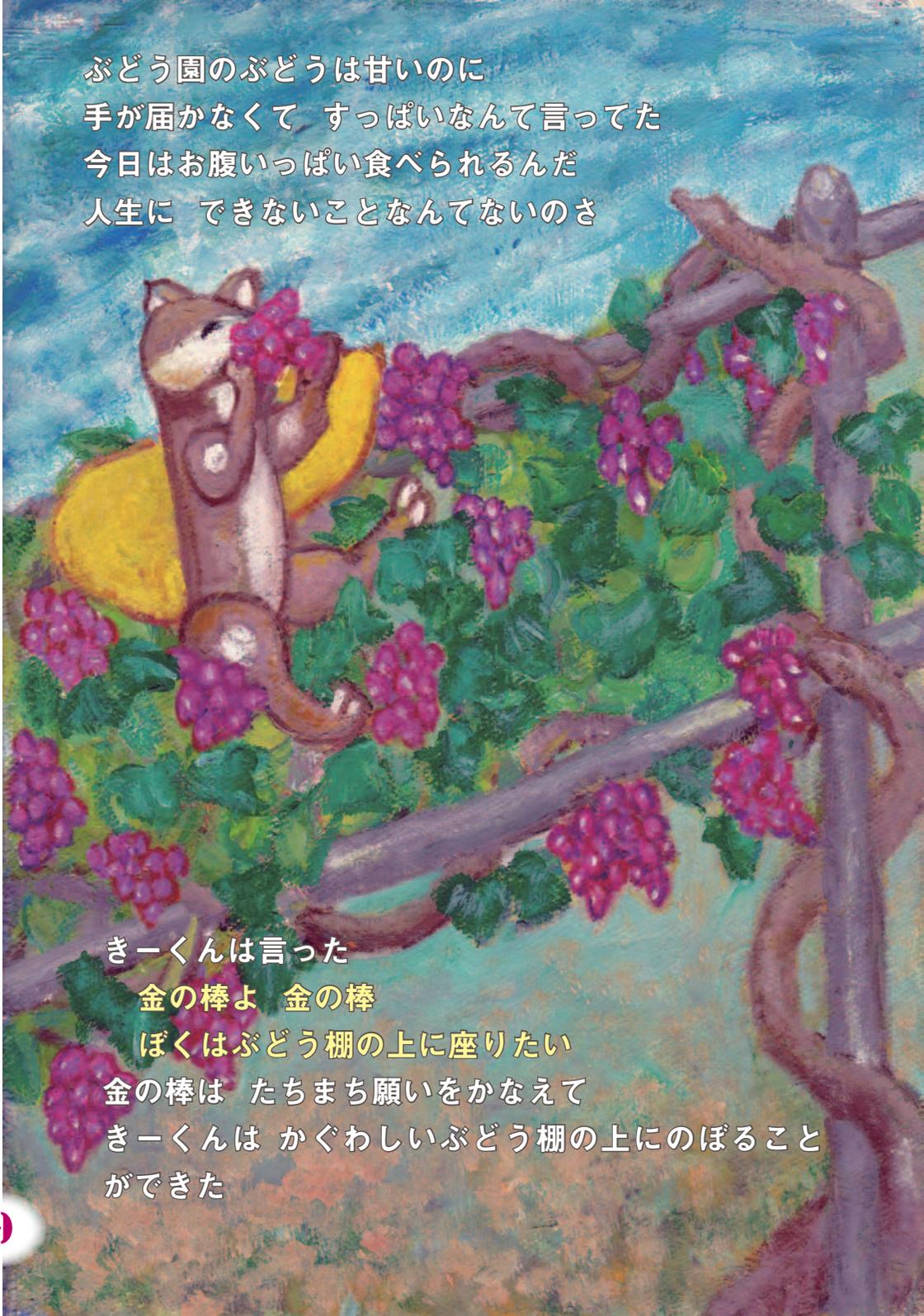


空夜の星 キラキラ  
子リスの寝言を聞き しんとなった  
星たちは互いに電話をかけ  
もう一つ金色のしっぽを作ることにした  
星たちは働き者  
一晩でしっぽは出来上がった  
星たちは日が昇る前に  
子リスのしっぽを付け替えた



白い雲 晴れ渡る青い空  
子リスはとってもうれしい  
金色のしっぽ ふかふか  
揺らしてみると ふわふわ

ほら 見て 私の金色のしっぽが戻ってきた  
早く家に帰って おかあさんに見せなくちゃ



ぶどう園のぶどうは甘いのに  
手が届かなくて すっぱいなんて言ってた  
今日はお腹いっぱい食べられるんだ  
人生に できないことなんてないのさ

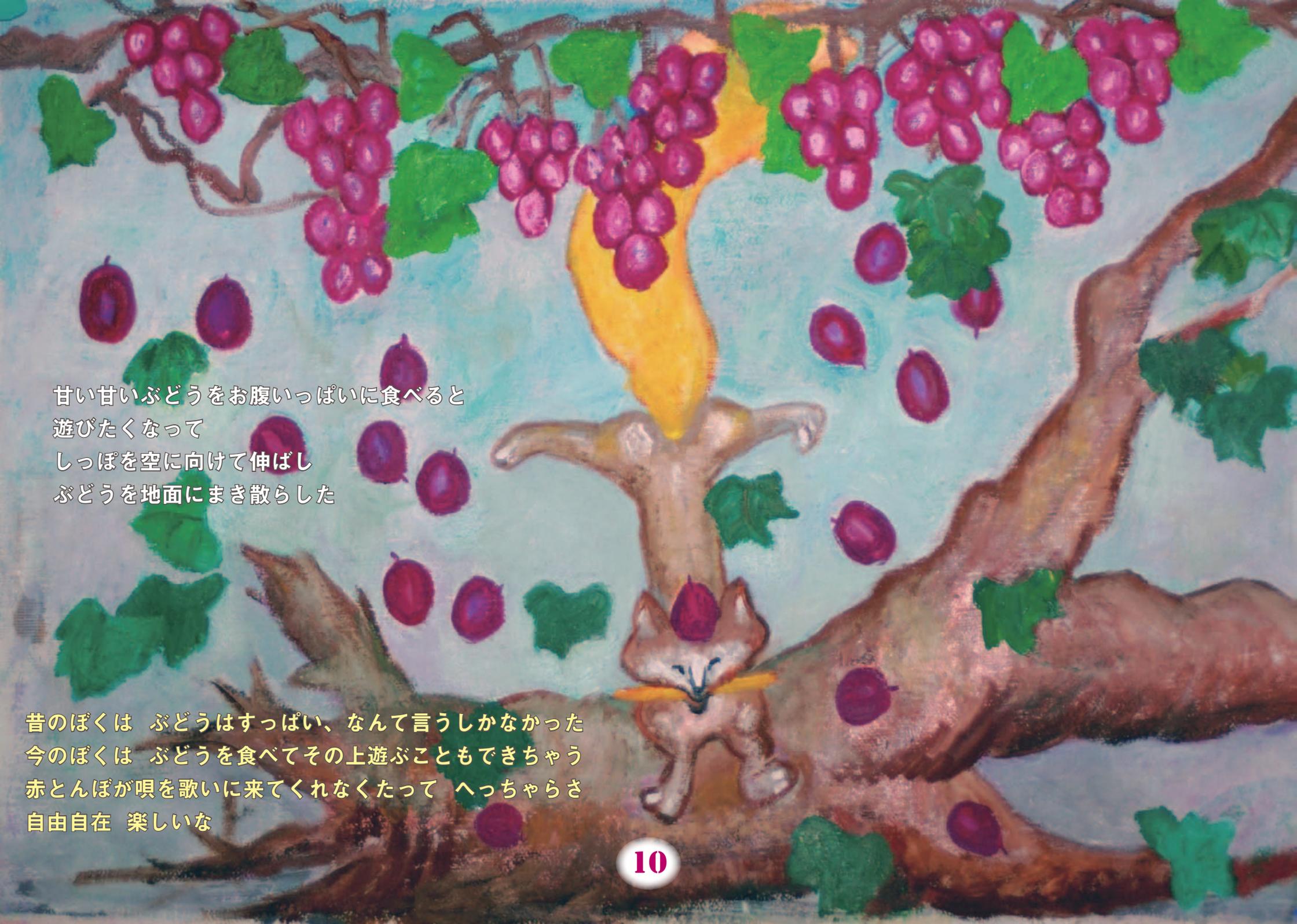
きーくんは言った

金の棒よ 金の棒

ぼくはぶどう棚の上に座りたい

金の棒は たちまち願いをかなえて

きーくんは かぐわしいぶどう棚の上のぼることができた



甘い甘いぶどうをお腹いっぱい食べると  
遊びたくなって  
しっぽを空に向けて伸ばし  
ぶどうを地面にまき散らした

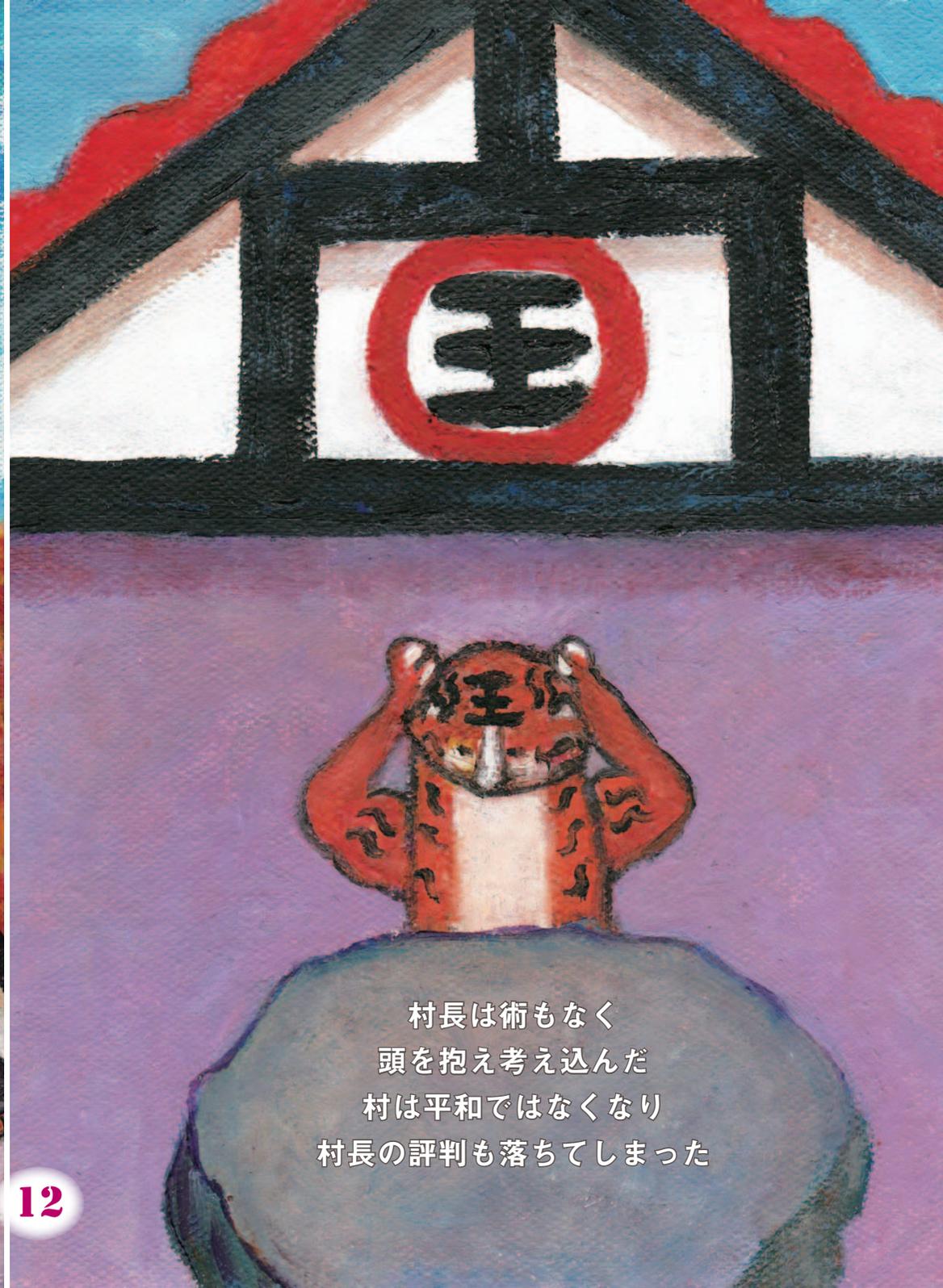
昔のぼくは ぶどうはすっぱい、なんて言うしかなかった  
今のぼくは ぶどうを食べてその上遊ぶこともできちゃう  
赤とんぼが唄を歌いに来てくれなくて へっちゃらさ  
自由自在 楽しいな

トラ村長は とても立派だ  
いい家に住み みんなから尊敬されている  
村長にしっぽ相撲を頼んでみよう  
村長を打ち負かして ぼくがこの村の村長になるんだ  
きーくんは村長の家にやってきた  
村長、しっぽ相撲してくれませんか  
村長はきーくんを見るなり  
きーくんをつかまえて 問いただそうとした





きーくんは飛び上がって驚き  
空へ駆け上がった  
雲の中 金の棒を振り回して  
ゆっくりと田舎を眺めた

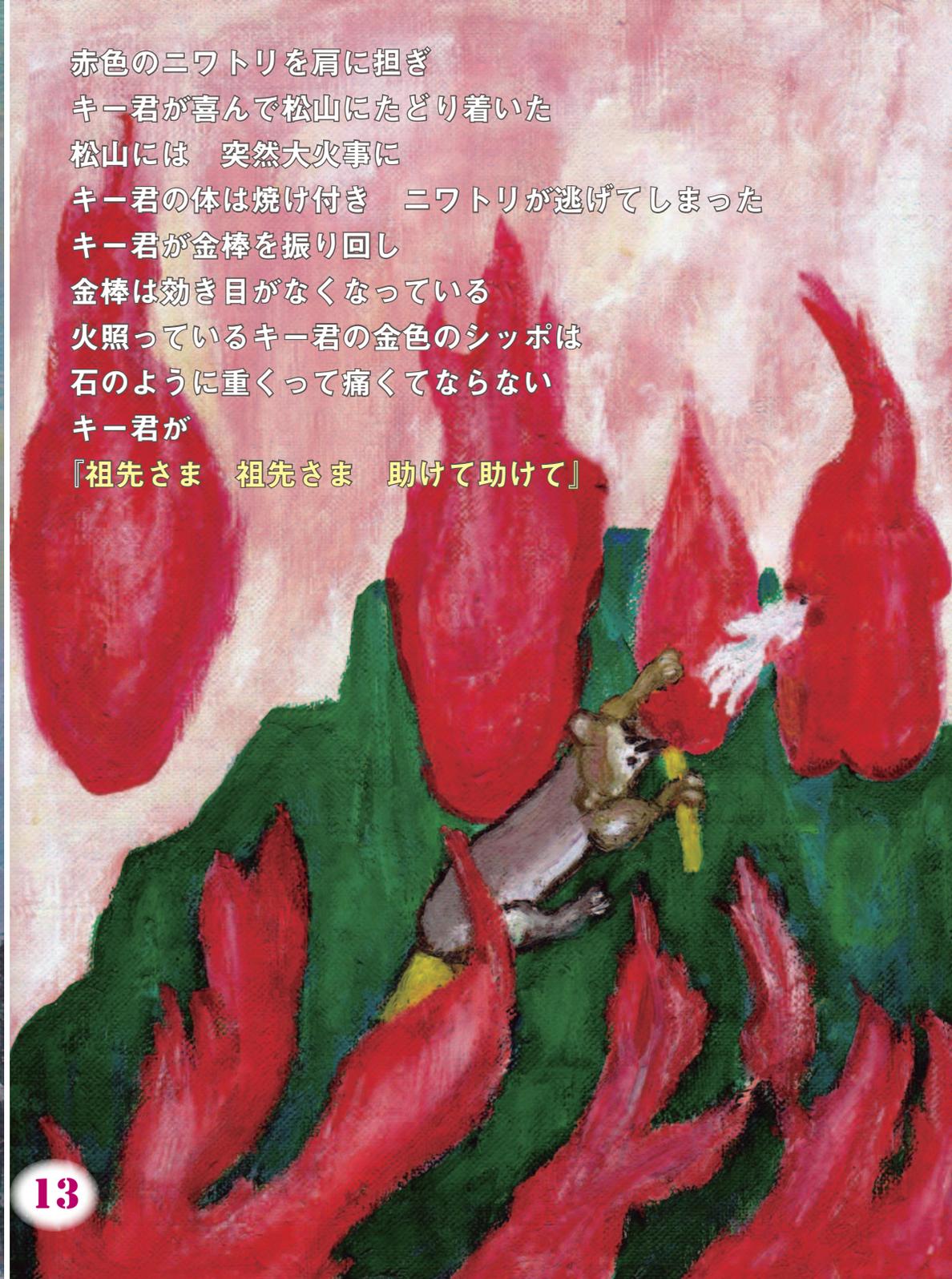


村長は術もなく  
頭を抱え考え込んだ  
村は平和ではなくなり  
村長の評判も落ちてしまった

きーくんは飛び上がって驚き  
空へ駆け上がった  
雲の中 金の棒を振り回して  
ゆっくりと田舎を眺めた



赤色のニワトリを肩に担ぎ  
キー君が喜んで松山にたどり着いた  
松山には 突然大火事に  
キー君の体は焼け付き ニワトリが逃げてしまった  
キー君が金棒を振り回し  
金棒は効き目がなくなっている  
火照っているキー君の金色のシッポは  
石のように重くなって痛くてならない  
キー君が  
『祖先さま 祖先さま 助けて助けて』



先祖様は雲の上に現れて 金棒を回収している最中祖先はキー君にこう言った  
『お前はいいことを言う 悪いことをやる わしは 天国に居ても安心出来ない』  
また こう言っておいた

『お前は人間の世界でやりほうだいー わしは神の世界で罰を当たっている  
神様は 365 粒花の種をくださった お前は一日一粒種を蒔き続けると幸せが戻ってくる』  
祖先がキー君に聞いた 『お前はど<sup>う</sup>する？』

いきさつは急に変化してしまい キー君の知恵は無用になってしまった やはり 365 粒花の  
種を蒔いて もとの幸せに戻られるように。キー君が言った

『ぼくは 誓<sup>ま</sup>います。ぼくは毎日一粒 365 粒花  
の種を蒔きます』



賢いキー君が愚かな事を二度としない  
自分の誓いを実行すると  
自分に言っておいた  
山は赤く木は黄色いに  
秋の風が冷たくて シッポは痛い  
シッポを鋤に縛り  
鋤を担いで種蒔きに行く





北風に雪が舞い  
キー君が歩けない  
木の下に腰を下ろして  
悔しい思いが胸いっぱい



ふっと栗山の麓で巧みに  
金色のシッポを奪い取る一瞬を  
思い出した



早春三月ぽかぽか暖かい  
花が咲き 柳が緑  
『昔ぼくが白い模様のシッポを空に立てって  
トンボも歌う村長も拍手してくれる』  
キー君がため息をつきながら独り言：  
『え～今は昔と違うよ  
今では 自分が辛抱強く蒔いた種さえ  
一本の芽も出してくれなかったよ  
やばり やめる  
ダメダメ やめては行けない』  
シッポを担ぎ籠をもつ  
キー君が種まきに行く  
また 目の前に何かがピカピカ光る  
どこかで見たことがあるよう  
キー君が目を丸くしてよく見たら  
まさか 子リスが金色のシッポをぐるぐる回してる  
『ぼくの白模様のシッポはどこに行った？  
子リスに聞こうとも聞けないものの』  
『え～ やばり花の種を蒔きに行く』



雲が白々と空は青く  
季節は夏に移り変わりつつ  
毎日一粒毎日一粒  
やがて最後の一粒を蒔く  
最後の一粒を蒔いたら  
その瞬間とっさに  
365粒の種が笑顔を出した

花は一つ一つ本当にきれい  
摘み取り籠にいっぱい詰める  
花は子リスに贈りたい  
お詫びも書いて花と一緒に  
お尻、痛～い  
キー君が振り向くと  
え～！ 自分の目がおかしいじゃないか

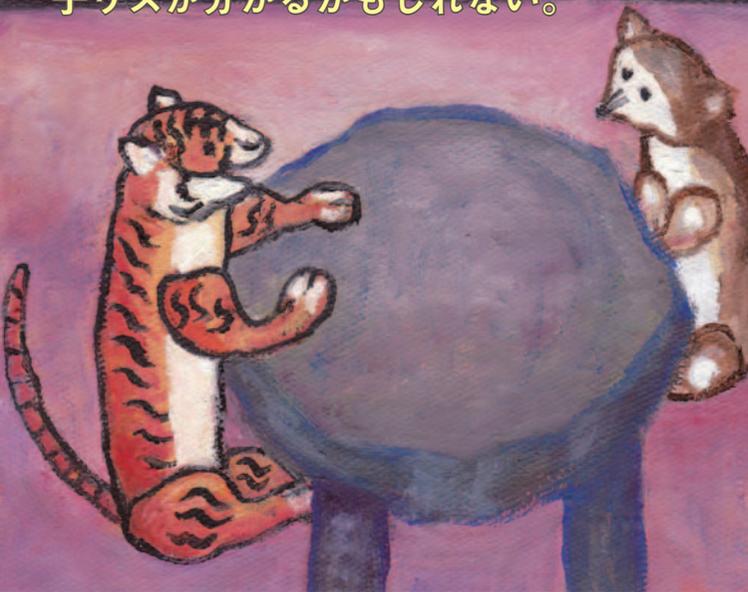


金色のシッポが  
どこにどんでいった  
お尻に自分の白い模様シッポが  
ふあ～ ふあ～  
ふしぎふしぎな～～  
シッポはシッポいったいどういうことか？

紅色家の上に夜空はきれい  
家にいるキー君が眠れない  
ふしぎなことをどうして  
考え考えても答えはでない  
夜は開けたら虎村長に聞こう  
村長がきっと答えがわかる



キー君が村長家のドアを叩いて  
村長さまおはよう ぼくは考えても考えても分  
らない事を村長さまから教えてほしいのです  
虎村長がニコニコしながら  
入れ入れ なんの用？  
実はシッポの事です…  
金色のシッポ！ 白い模様のシッポ！ ～～  
虎村長がそう言った  
よく聞いてよきみ！ きみの質問には 私も分  
らないよ  
一緒に子リスに聞いてみよう。  
子リスが分かるかもしれない。



子リス：ママ ママ キツネのキー君がまた来たよ  
母リス：虎村長も来てる 様子を見よう  
キー君は子リスに顔を見せるのは恥ずかしいので  
虎村長の後ろに隠れた  
虎村長が子リスに聞いて  
きみの金色のシッポはどうやって戻ってきたの？  
子リスは両手を広げて  
どうやって戻ってきたのか ぼくもよくわかりませんが～  
木の枝にとまっていた赤トンボが大きな声で歌いだした  
『その晩は悲しかった 夜に子リスが夢の中で泣いた  
雨が突然降りだし 空に星が光った』  
赤トンボが言った  
「その時、星たちはシッポしっぽと話をしたよ  
私たち、星たちにお話を聞きましょう」



子リス リス母さん キー君 虎村長が一行に並び、  
赤トンボがキー君のシッポとまって みんなが星にたずねる。

『一本の金色のシッポ あったり無かったり わけが分かりません  
お星様、教えてください。分かったら私たちの言い伝えになります』

星がまたたいている  
星が黙っている  
星が一齐に 飛んできて  
みんなが 「やった!」と叫んだ

赤トンボは歌が好き 田舎の幸せを歌う  
『夜空に星が きらきら 田舎の人々が 笑顔  
夜空の星が村にいらしゃる  
田舎の四季がすべて春』

星が光にかがやき  
皆が歌いをだした  
歌って 踊って  
田舎生活はしあわせ





終わり